

狼の恩返し

ざっとむかし、新田に度胸のある、心のやさしい力持ちの若者がいたんだと。

あるとき、若者は用があつて、となりむらにいったんだと。用がながくかかつて、夜おそくなつてしまつたんだと。この夜は月がでていて、あかるかつたんだと。月あかりをたよりに、急いで帰つてくつと、道端で「グウォー グウォー」って鳴く声が聞えてきたんだと。近よつてよくみると、狼がもがき苦しんでいたんだと。

若者はかわいそうに思つて「どれ、よくみせてみる。」つてゆつて、月のあかりで狼の口の中をよくみつと動物の骨みたいなのが歯ぐきにささつていたんだと。「よしよし、いまとつてくれっから」つてゆつて、口の中に手を入つち、とつてくつちゃんだと。いたくなくなつた狼は、ありがたく思つたんだべ、うんとおじぎをして、どっかに立ち去つていったんだと。

何日かたつてから、若者は用があつて、またとなりむらにでかけたんだと。夜もおそくなつてつから、急いで帰つ

てくつと、この前と同じところで、狼がまっちいたんだと。若者は急いでいたから、何もゆわねえで前を通りすぎつべとしたんだと。そしたら狼は、若者の五・六歩あとをだまつてついてきたんだと。とうとう、若者げの入口までついてきたんだと。狼は、歯ぐきの骨をとつてもらつたお礼をすつべとしたんだべ。若者が

「わざわざついてきてくつち、ありがとう」つてゆつたら、狼はどこかに立ち去つていったんだと。そのあとも、若者が用があつて、夜遅く帰つてくつと、何回も何回もおともをしてくつちゃんだと。若者は氣の毒になつて、狼にゆつたんだと。

「あんときの恩返しすつべどして、おともをしてくれでんだべ。その気持ちはわかつたから、送り迎えのおともはやめておくれ」そのかわり、おれのほんのきもちで石の祠をつくつて、おめえを祠つてやつから」

この村の西のはずれには、でっけえ池があつたんだと。日でりで雨が降んねえときには、田んぼの水をかけんに、うんとやくにたつていたんだと。

若者は、この大池のわきの山のところにちつちえ祠をつ